

■第一段落 第二節（五四・1～五四・6）

一 「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」（五四・1）について、

(1) 「いつ」「誰が」「どこで」「何を」「していた」かをまとめよ。

いつ	〔		〕	誰が	〔		〕
どこで	〔		〕	何を	〔		〕
していた	〔		〕				

(2) 「ある日の暮れ方」という時間帯の設定は、物語にどのような印象を与えるか。

〔

(3) 主人公に名前を与えず、「下人」としているのはなぜか。

〔

二 「広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹と

まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない」（五四・3）について、

(1) 下人のいる羅生門の様子はどのようなであったか。

〔

(2) 「きりぎりすが一匹とまっている」という表現から、季節はいつだと考えられるか。

〔

(3) 「きりぎりすが一匹とまっている」という表現は、どのような効果を上げているか。

〔

(4) 「羅生門」は、京都のどこに位置していたか。

〔

(5) 「羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである」のはなぜか。

〔

■第一段落 第二節（五四・7～五六・14）

一 「（二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉

とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである」（五四・7）について、

(1) 「洛中」とは、どこのことか。

〔

(2) 「洛中」の外は何というか。

〔

(3) 当時の京都の様子はどうだったか。また、それはなぜか。

様子	〔		〕
なぜ	〔		〕

(4) 「旧記によると」という表現は、どのような効果を上げているか。

〔

(5) 「薪の料」とは、何のことか。

〔

(6) 「仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていた」からは、どのようなことがうかがえるか。

〔

二 「洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのを

よいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいは、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしなことになってしまったのである」（五四・10）について、

(1) 「もとより」の意味を調べよ。

〔

(2) 「顧みる」の意味を調べよ。

〔

(3) 「狐狸が棲む。盗人が棲む」からは、羅生門付近がどのような状況にあることがうかがえるか。

〔

(4) 「日の目」の意味を調べよ。

〔

〔 〕
(5)「目の目が見えなくなる」とは、ここではどういう意味か。
〔 〕
(6)「足踏み」とは、ここではどういう意味か。
〔 〕

三 「その代わりまたからすがどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、そのからすが何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた」(五六・6)について、
(1)「その代わり」の「その」は、何を指しているか。
〔 〕
(2)からすの描写は、どのような効果を上げているか。
〔 〕

(3)「殊に」の意味を調べよ。
〔 〕
〔 〕

四 「——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」(五六・10)について、

(1)「刻限」の意味を調べよ。
〔 〕
(2)「洗いざらした紺の襖」からは、「下人」がどのような状況にあったことがうかがえるか。
〔 〕
(3)「下人」に「大きなきび」があることから、「下人」がどのような人物であることがうかがえるか。
〔 〕

■第一段落 第三節(五六・15～五七・12)
一 「作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも

書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた」(五六・15)について、
(1)ここで突如「作者はさつき」と語り手の「作者」が登場する。これはどのような役割を果たしていると考えられるか。
〔 〕

(2)「暇を出す」の意味を調べよ。
〔 〕
(3)「衰微」の意味を調べよ。
〔 〕

二 「今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人のSentimentalismに影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない」(五七・3)について、

(1)「余波」の意味を調べよ。
〔 〕
(2)「途方に暮れる」の意味を調べよ。
〔 〕
(3)ここでの「下人」は、どのような状況に置かれているか。
〔 〕

(4)「Sentimentalism」というフランス語は、どのような効果を上げているか。
〔 〕
(5)「申の刻」とあるが、「子の刻」は今の何時から何時に当たるか。
〔 〕
(6)「気色」の意味を調べよ。
〔 〕

■第一段落 第四節(五七・13～五九・4)
一 「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあという音を集めて来る。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した薨の先に、重たく薄暗い雲を支えている」(五七・13)について、

(1) 「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めて来る」という一文で使用されている表現技法は何か。

〔

〕

二 「どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとまはない。選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである」(五八・1)について、

(1) 「どうにもならないこと」とは何か。

〔

〕

(2) 「いとま」の意味を調べよ。

〔

〕

(3) 「手段を選んでいいとまはない」からは、「下人」のどのような状況がうかがえるか。

〔

〕

三 「選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということ、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである」(五八・4)について、

(1) 「局所」の意味を調べよ。

〔

〕

(2) 「逢着」の意味を調べよ。

〔

〕

(3) 「すれば」に「」が付いているのはなぜか。

〔

〕

(4) 「かたをつける」の意味を調べよ。

〔

〕

四 「下人は、大きくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった」(五八・9)について、

(1) 「大儀」の意味を調べよ。

〔

〕

(2) 「下人は、大きくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった」からは、どのようなことがうかがえるか。

(3) 「くさめ」はこの場面でどのような役割を果たしているか。

〔

〕

(4) 「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった」(五八・11)という描写は、どのような効果を上げているか。²

〔

〕

五 「雨風の憂えのない、人目にかかる恐れのない、一晚楽に寝られそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」(五八・14)について、

(1) 「人目にかかる恐れのない」とあるが、「人目にかかる」ことを恐れたのはなぜか。

〔

〕

(2) 「人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」からは、「下人」のどのような心情がうかがえるか。

〔

〕

■第二段落 第一節(五九・5～六一・8)

一 「それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしが中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくっていた」(五九・5)について、

(1) 「下人」を「一人の男」(五九・7)としているのはなぜか。³

〔

〕

(2) 「息を殺す」の意味を調べよ。

〔

〕

(3) 「ぬらしている」とあるが、本来どのように表現されるべきか。

〔

〕

(4) 「ぬらしている」は、どのような表現効果があるか。

〔

〕

(5) 「高をくくる」の意味を調べよ。

〔

〕

「

二 「はしごを二、三段上つてみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない」(五九・14)について、

(1)「それと知れた」の「それ」は何を指すか。

「

(2)「どうせただの者ではない」といえるのはなぜか。

「

三 「下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まではようようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた」(六〇・4)について、

(1)「やもりのように」の比喻は、どのような動作を表現しているのか。

「

四 「見ると、楼の内には、うわさに聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあると

いうことである」(六〇・7)について、

(1)「無造作」の意味を調べよ。

「

(2)「裸の死骸と、着物を着た死骸」はどう違うか、想像せよ。

「

五 「下人は、それらの死骸の腐乱した臭氣に思わず、鼻をおおった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻をおおうことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである」(六一・1)について、

(1)「もう鼻をおおうことを忘れていた」という状態になったのは、下人のどのような行為によるか。「ことごとく」につづく形で本文中から抜き出して答えよ。

「

(2)「ある強い感情」(六一・2)とは、どのような感情か。4

「

六 「下人の目は、その時、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆である」(六一・4)について、

(1)「下人は……見た」とせずに「下人の目は……見た」とすること、どのような効果を上げているか。

「

(2)「檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような」と五つもの形容を重ねている表現は、どのようなことを強調しているのか。

「

■第二段落 第二節(六一・9～六二・11)

一 「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである」(六一・9)について、

(1)「六分の恐怖と四分の好奇心」とは、何に対する「恐怖」と「好奇心」か。

「

(2)「暫時」の意味を調べよ。

「

(3)「呼吸をするのさえ忘れていた」のはなぜか。

「

二 「その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。——いや、この老婆に対するとっては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである」(六一・14)について、

(1)「下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった」のはなぜか。

「

(2)「憎悪」の意味を調べよ。

「

(3)「下人」が老婆に対して「激しい憎悪」を感じたのはなぜか。

「

(4)「語弊」の意味を調べよ。

「

三 「この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を改めて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう」(六二・3)について、

(1)「未練」の意味を調べよ。

「

(2)「何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう」とは、どういうことか。

「

四 「下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわからなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけですでに許すべからざる悪であった」(六二・7)について、

(1)「合理(的)」の意味を調べよ。

「

(2)「合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわからなかった」とは、どういうことか。

「

「

■第三段落 第一節(六二・12～六四・2)

一 「そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたの言うまでもない。老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛

び上がった。「おのれ、どこへ行く。」下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こう罵った」(六二・12)について、

(1)下人が「いきなり、はしごから上へ飛び上がった」とは、どのような様子を表しているのか。

「

(2)「おのれ、どこへ行く」の「おのれ」という言葉の意味合いはどのようなものか。

「

二 「老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、初めから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちようど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へ突きつけた」(六三・3)について、

(1)「勝敗は、初めから、わかっている」にもかかわらず、「老婆は、それでも下人を突きつけて行こうとする」理由は何か。

「

(2)「ちようど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である」

「

(六三・6)からは、「老婆」のどのような状況がうかがえるか。^[5]

「

(3)「白い鋼の色」とあるが、普通「白い鋼の太刀」と表現すると思われるが、なぜこう表現したのか。

「

「

三 「下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」(六三・12)について、

(1)「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されている」ということを意識した」結果、「今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」という「下人」の心情

はどのようなものか。

(2)「今まで険しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」のはなぜか。

(3)「成就」の意味を調べよ。

(4)「成就」の語を用いた四字熟語を書け。

■第三段落 第二節（六四・3～六五・14）

一 「おれは検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていただか、それをおれに話しさえすればいいのだ。」すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った」（六四・3）について、

(1)「おれは検非違使の庁の役人などではない」という言葉からは、「下人」のどのような意図がうかがえるか。

(2)「老婆」が「じっとその下人の顔を見守った」のはなぜか。

二 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思つたのじゃ。」下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな侮蔑と一緒に、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、褄のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った」（六四・12）について、

(1)「存外」の意味を調べよ。

(2)「老婆の答えが存外、平凡なのに失望した」（六四・13）とあるが、「下人」はどのような答えを期待していたのか。^[6]

(3)「侮蔑」の意味を調べよ。

(4)「冷ややかな侮蔑」とは何に対する感情か。

(5)「その気色が、先方へも通じた」とは、ここではどういうことか。

三 「わしは、この女のしたことが悪いとは思っていない。せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくなることである。

されば、今また、わしのしていたことも悪いことは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるである」（六五・9）について、

(1)老婆は「わしのしていたことも悪いことは思わぬぞよ」という言い訳を述べているが、どういうことか。「許される」という言葉を使って、二つあげよ。

(2)「大目に見る」の意味を調べよ。

■第三段落 第三節（六五・15～六七・3）

一 「下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である」（六五・15）について、

(1)「冷然」の意味を調べよ。

(2)下人が老婆の話を「冷然として」「聞いていた」のはなぜか。

(3)「ある勇気が生まれてきた」とあるが、それはどのような「勇気」か。

二 「きつと、そうか。」老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。「では、おれが引剥ぎをしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」(六六・9)について、

(1)「嘲る」の意味を調べよ。

(2)「念を押す」の意味を調べよ。

(3)「嘲るような声で念を押した」(六六・10)からは、「下人」のどのような心情がうかがえるか。7

(4)「不意」の意味を調べよ。

三 「下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた」(六六・15)について、

(1)「下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった」とあるが、この行為は「下人」のどのような意思表示か。

(2)「夜の底へかけ下りた」とあるが、この表現は下人のどのような未来を暗示しているか。

■第四段落 第二節(六七・4～六七・9)

一 「しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はって行った。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない」(六七・4)について、

(1)「死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こした」とあるが、「老婆」のどのような心がうかがえるか。

(2)「黒洞々たる夜」とは、どのような夜か。

(3)「黒洞々たる夜」(六七・8)という表現は、どのような効果を上げているか。8

(4)「下人の行方は、誰も知らない」とあるが、下人はこの後どうなったと考えられるか。

■作者「芥川龍之介」について、文学辞典や国語便覧(国語資料集)などで調べてみよう。

(1)彼の文学的立場は、菊池寛や久米正雄らとともに何と呼ばれたか。

(2)彼の作品『鼻』を激賞した作家は誰か。

(3)彼に文学的な影響を受けた主な作家は誰か。

(4)この『羅生門』や、『鼻』以外の彼の代表作をあげよ。

羅生門				
授業プリント				
学年	組	番号	名前	

■第一段落 第一節（五四・1～五四・6）

一 「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」（五四・1）について、

（1）「いつ」「誰が」「どこで」「何を」「していた」「かをまとめよ。

いつ 誰が 一人の下人が
どこで 羅生門の下で 何を 雨やみを
していた 待っていた

（2）「ある日の暮れ方」という時間帯の設定は、物語にどのような印象を与えるか。

「不気味で何か不吉なことが起こりそうな印象。」

（3）主人公に名前を与えず、「下人」としているのはなぜか。

「特定の個人的な話ではなく、広く一般的な共通の話としての意識を読者に持たせるため。」

二 「広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、ところどころ丹塗りの剝げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹と

まっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない」（五四・3）について、

（1）下人のいる羅生門の様子はどのようなであったか。

「下人のほか誰も見当たらない、閑散とした寂しい様子。」

（2）「きりぎりすが一匹とまっている」という表現から、季節はいつだと考えられるか。

「秋」

（3）「きりぎりすが一匹とまっている」という表現は、どのような効果を上げているか。

「秋という季節感とこの場面の中に虫が一匹しかいないという寂寥感を表す効果。」

（4）「羅生門」は、京都のどこに位置していたか。

「平安京の中央の通り朱雀大路の南端。」

（5）「羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである」のはなぜか。

「本来「羅生門」は、都の出入り口となる人の行き来が頻繁である場所だから。」

■第二段落 第二節（五四・7～五六・14）

一 「（二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉

とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである」（五四・7）について、

（1）「洛中」とは、どこのことか。

「京都（京の都）の中心部。」

（2）「洛中」の外は何というか。

「洛外。」

（3）当時の京都の様子はどうだったか。また、それはなぜか。様子 ひどく荒れ果てた様子。

なぜ 地震、辻風、飢饉などの災いが続いたから。

（4）「旧記によると」という表現は、どのような効果を上げているか。

「歴史的事実として裏づけられていることを示すことで、語りの信憑性を高める効果。」

（5）「薪の料」とは、何のことか。

「薪の材料。」

（6）「仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていた」からは、どのようなことがうかがえるか。

「人々は生活が苦しく、精神的にも荒廃していたということ。」

二 「洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのを

よいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいは、引き取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないうことになってしまったのである」（五四・10）について、

（1）「もとより」の意味を調べよ。

「言うまでもなく。もちろん。」

（2）「顧みる」の意味を調べよ。

「過ぎ去ったことを思い起こす。後ろを振り向いて見る。」

（3）「狐狸が棲む。盗人が棲む」からは、羅生門付近がどのような状況にあることがうかがえるか。

「まともな人間が生活できる空間ではなく、忌まわしい者が住む異空間になっている状況。」

（4）「日の目」の意味を調べよ。

〔日光。日差し。〕

(5)「日の目が見えなくなる」とは、ここではどういう意味か。

〔「日暮れ時になる」という意味。〕

(6)「足踏み」とは、ここではどういう意味か。

〔「足を踏み入れる」という意味。〕

三 「その代わりまたからすがどこからか、たくさん集まって来

た。昼間見ると、そのからすが何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた」(五六・6)について、

(1)「その代わり」の「その」は、何を指しているか。

〔羅生門の周りに誰も人がいなくなったこと。〕

(2) からの描写は、どのような効果を上げているか。〔1〕

〔夕焼け空にからすが点在するという色彩の対照を映像的に想像させる効果と死肉をついばむからすが集まる羅生門の不気味さを強調する効果。〕

(3)「殊に」の意味を調べよ。

〔特に。とりわけ。〕

四 「——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からのすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襦の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた」(五六・10)について、

(1)「刻限」の意味を調べよ。

〔時刻。とき。時間。〕

(2)「洗いざらした紺の襦」からは、「下人」がどのような状況にあったことがうかがえるか。

〔紺の襦を何度も洗っては着ており、それ以外のものはあまり持っていない状況。〕

(3)「下人」に「大きなきび」があることから、「下人」がどのような人物であることがうかがえるか。

〔若くて生命力のある人物であること。〕

■第一段落 第三節 (五六・15 ～ 五七・12)

一 「作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも

書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた」(五六・15)について、

(1)ここで突如「作者はさつき」と語り手の「作者」が登場する。これはどのような役割を果たしていると考えられるか。

〔「下人」を取り巻く状況について、第三者の立場から情景を説明したり、時には「下人」の心情に寄り添って語ったりする役割。〕

(2)「暇を出す」の意味を調べよ。

〔使用人や奉公人を解雇する。〕

(3)「衰微」の意味を調べよ。

〔勢いがなくなり、衰えること。〕

二 「今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから

「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言うほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人のSentimentalismに影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない」(五七・3)について、

(1)「余波」の意味を調べよ。

〔ある物事が他に影響を与えること。また、その影響。〕

(2)「途方に暮れる」の意味を調べよ。

〔てだてがなくなり、どうしてよいかわからなくなる。〕

(3)ここでの「下人」は、どのような状況に置かれているか。

〔京都の町がひととおりならず衰微した小さな余波を受けて、永年使われていた主人から暇を出され、雨に降りこめられて行き所もなく、羅生門の下で途方に暮れている状況。〕

(4)「Sentimentalism」というフランス語は、どのような効果を上げているか。

〔視覚的に読者の目を留める効果。〕

(5)「申の刻」とあるが、「子の刻」は今の何時から何時に当たるか。

〔午後十一時から午前一時。〕

(6)「気色」の意味を調べよ。

〔物事の様子。何かが起ころうとするきざし。〕

■第一段落 第四節 (五七・13 ～ 五九・4)

一 「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあという音を集めて来る。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い雲を支えてい

る（五七・13）について、

(1) 「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めて来る」という一文で使用されている表現技法は何か。

〔擬人法。〕

二 「どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を

選んでいるいとまはない。選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである」（五八・1）について、

(1) 「どうにもならないこと」とは何か。

〔明日の暮らし。〕

(2) 「いとま」の意味を調べよ。

〔ひま。何かをするための時間。〕

(3) 「手段を選んでいるいとまはない」からは、「下人」のどのような状況がうかがえるか。

〔盗人になるしか道は残されていないという状況。〕

三 「選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊

したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人

は、手段を選ばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来るべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということをし、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである」（五八・4）について、

(1) 「局所」の意味を調べよ。

〔全体の中的一部分。〕

(2) 「逢着」の意味を調べよ。

〔出会うこと。行き当たること。〕

(3) 「すれば」に「」が付いているのはなぜか。

〔仮定の域を出ないことを強調するため。〕

(4) 「かたをつける」の意味を調べよ。

〔物事をきちんと解決する。決着をつける。〕

四 「下人は、大きくさめをして、それから、大儀そうに立ち

上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった」（五八・9）について、

(1) 「大儀」の意味を調べよ。

〔面倒なこと。億劫なこと。また、その様子。〕

(2) 「下人は、大きくさめをして、それから、大儀そうに立ち

上がった」からは、どのようなことがうかがえるか。

〔晩秋の空気が冷たく、寒さをしのぐためにしぶしぶ立ち上がったということ。〕

(3) 「くさめ」はこの場面でどのような役割を果たしているか。

〔「下人」が次の行動に移るきっかけとなる役割。場面が変わることのきっかけとなる役割。〕

(4) 「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった」（五八・11）という描写は、どのような効果を上げているか。〔2〕

〔時間の経過を表す効果。〕

五

「雨風の憂えない、人目にかかる恐れのない、一晚楽に寝られそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗ったはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」（五八・14）について、

(1) 「人目にかかる恐れのない」とあるが、「人目にかかる」ことを恐れたのはなぜか。

〔人に危害を加えられるかもしれないから。〕

(2) 「人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」からは、「下人」のどのような心情がうかがえるか。

〔生きている人間よりも、死人と一緒にいる方が、煩わしくなくむしろ気楽だという気持ち。〕

■第二段落 第一節（五九・5～六一・8）

一 「それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしがこの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高をくくつていた」（五九・5）について、

(1) 「下人」を「一人の男」（五九・7）としているのはなぜか。〔3〕

〔新たな物語展開を読者に印象づけるため。〕

(2) 「息を殺す」の意味を調べよ。

〔息の音も立てずに、静かにじっとしている。〕

(3) 「ぬらしている」とあるが、本来どのように表現されるべきか。

〔照らしている。〕

(4) 「ぬらしている」は、どのような表現効果があるか。

〔「火の光」をまるで液体のようにとらえ、楼上の不気味な雰囲気を象徴するような表現効果。〕

(5)「高をくくる」の意味を調べよ。

「たいしたことはないだろうと予想する。甘く見る。」

二 「はしごを二、三段上つてみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない」(五九・14)について、

(1)「それと知れた」の「それ」は何を指すか。

「はしごの上で誰かが火をともして動かしているさま。」

(2)「どうせただの者ではない」といえるのはなぜか。

「雨の夜という人が出歩かない時間帯であり、死人ばかりで生きた人間がいるはずのない場所に存在する者だから。」

三 「下人は、やもりのように足音を盗んで、やつと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた」(六〇・4)について、

(1)「やもりのように」の比喻は、どのような動作を表現しているのか。

「足音をさせない、はうような動作。」

四 「見ると、楼の内には、うわさに聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである」(六〇・7)について、

(1)「無造作」の意味を調べよ。

「手間をかけないこと。深く気を遣わないこと。また、そのさま。」

(2)「裸の死骸と、着物を着た死骸」はどう違うか、想像せよ。

「裸の死骸」は着物を剥ぎ取られ捨てられたもの、あるいは捨てられた後に盗人やからすに荒らされたもの。「着物を着た死骸」は剥ぎ取るだけの値打ちのないもの、あるいは最近運ばれてきたもの。

五 「下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻をおおった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻をおおうことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである」(六一・1)について、

(1)「もう鼻をおおうことを忘れていた」という状態になったの

は、下人のどのような行為によるか。「こと。」につづく形で本文中から抜き出して答えよ。

「死骸の中にうずくまっている人間を見た」

(2)「ある強い感情」(六一・2)とは、どのような感情か。⁴

「六分の恐怖と四分の好奇心。」

六 「下人の目は、その時、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆である」(六一・4)について、

(1)「下人は……見た」とせずに「下人の目は……見た」とすることで、どのような効果を上げているか。

「思考が停止し、すぐにはそれと認識できないほど、老婆の姿に衝撃を受けたことを印象づける効果。」

(2)「檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような」と五つもの形容を重ねている表現は、どのようなことを強調しているのか。

「老婆の存在感を強く印象づけ、突然目の前に出現した正体の知れない存在に対して、目を見開いて凝視している下人の視線を強調している。」

■第二段落 第二節(六一・9～六二・11)

一 「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである」(六一・9)について、

(1)「六分の恐怖と四分の好奇心」とは、何に対する「恐怖」と「好奇心」か。

「不気味な容姿をした得体の知れない老婆に対する恐怖と、女の死骸の顔をのぞきこむ理由に対する好奇心。」

(2)「暫時」の意味を調べよ。

「少しの間。しばらくの間。」

(3)「呼吸をするのさえ忘れていた」のはなぜか。

「息をすることさえ忘れるほど強烈な印象を老婆から受けたから。」

二 「その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。――いや、この老婆に対すると言っては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである」(六一・14)について、

(1)「下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった」のはなぜ

か。

「不気味で不可解な老婆の行為を繰り返して見ているうちに、老婆が何をしているのかがわかり、恐怖が薄らいでいったから。」

(2) 「憎悪」の意味を調べよ。

「憎み嫌うこと。」

(3) 「下人」が老婆に対して「激しい憎悪」を感じたのはなぜか。

「異常な状況下で死人の髪を抜く老婆の行為は「許すべからざる悪」であるから。」

(4) 「語弊」の意味を調べよ。

「言葉の使い方が適切でないため誤解が生じる言い方。」

三 「この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を改めて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死を選ぶんだことであろう」(六二・3)について、

(1) 「未練」の意味を調べよ。

「心残りがあって、あきらめきれないこと。」

(2) 「何の未練もなく、飢え死を選ぶんだことであろう」とは、どういうことか。

「「下人」は正義感が高揚し、盗人になるより飢え死にする方がましだと思ったこと。」

四 「下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわらなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪を抜くということが、それだけですでに許すべからざる悪であった」(六二・7)について、

(1) 「合理(的)」の意味を調べよ。

「筋が通っていること。論理的に正しいこと。「合理的」は、論理にならっている様子。」

(2) 「合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわらなかった」とは、どういうことか。

「老婆が死人の髪を抜くという行為について、その理由が「下人」にはわからないので、老婆の行為の善悪を論理的に判断することはできないということ。」

■第三段落 第二節(六二・12～六四・2)

一 「そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股

に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたのは言うまでもない。老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。「おのれ、どこへ行く。」下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こう罵った」(六二・12)について、

(1) 下人が「いきなり、はしごから上へ飛び上がった」とは、どのような様子を表しているのか。

「老婆の行為に対する憎悪の感情を、衝動的に爆発させている様子。」

(2) 「おのれ、どこへ行く」の「おのれ」という言葉の意味合いはどういうものか。

「老婆を威嚇する意味合い。」

二 「老婆は、それでも下人を突きつけて行くとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押し戻す。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、初めから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちようど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へ突きつけた」(六三・3)について、

(1) 「勝敗は、初めから、わかっている」にもかかわらず、「老婆は、それでも下人を突きつけて行くとする」理由は何か。

「自身の行為が許せざる悪だと自覚している老婆は、その行為がきつく責められる恐怖におのいたから。」

(2) 「ちようど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である」(六三・6)からは、「老婆」のどのような状況がうかがえるか。5

「飢え死にをしかけている生死がぎりぎりの極限状況。」

(3) 「白い鋼の色」とあるが、普通「白い鋼の太刀」と表現すると思われるが、なぜこう表現したのか。

「「白い鋼の色」と表現することによって、暗闇の中に鋼の閃光が走る様子を読者に印象づけ、太刀の鋭さをイメージさせる狙いから。」

三 「下人は初めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」(六三・12)について、

(1) 「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているという

ことを意識した」結果、「今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」という「下人」の心情はどのようなものか。

「死人に向かってこそそこを何かをしている、得体の知れない不気味な人間に対する恐怖が薄らいだという心情。」

(2)「今まで陰しく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」のはなぜか。

「悪であると思っていた老婆が一人の無力な人間に過ぎないと意識したとき、悪を憎む心も冷めていったから。」

(3)「成就」の意味を調べよ。

「目的を遂げること。また、願いがかなうこと。」

(4)「成就」の語を用いた四字熟語を書け。

「大願成就」

■第三段落 第二節（六四・3～六五・14）

一 「おれは検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていただか、それをおれに話しさえすればいいのだ。」すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った」（六四・3）について、

(1)「おれは検非違使の庁の役人などではない」という言葉からは、「下人」のどのような意図がうかがえるか。

「おびえている老婆を安心させて、死人の髪の毛を抜く理由を答えさせようとする意図。」

(2)「老婆」が「じっとその下人の顔を見守った」のはなぜか。

「下人の言葉に警戒心を抱き、その真意を探ろうとしているから。」

二 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思つたのじゃ。」下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな侮蔑と一緒に、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った」（六四・12）について、

(1)「存外」の意味を調べよ。

「思っていたのと違うこと。思いのほか。案外。」

(2)「老婆の答えが存外、平凡なのに失望した」（六四・13）とあるが、「下人」はどのような答えを期待していたのか。

「人間の常識では考えられないような不気味で恐ろしい答え。」

(3)「侮蔑」の意味を調べよ。

「相手を見下しさげすむこと。」

(4)「冷ややかな侮蔑」とは何に対する感情か。

「老婆の平凡な答え。」

(5)「その気色が、先方へも通じた」とは、ここではどういうことか。

「下人の老婆に対する失望・憎悪・侮蔑といった心情が、下人の表情や態度に現れ、それを老婆が感じ取ったということ。」

三

「わしは、この女のしたことが悪いとは思っていない。せねば、飢え死にするのじゃて、しかたがなかったことである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるである」（六五・9）について、

(1)老婆は「わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ」という言い訳を述べているが、どういうことか。「許される」という言葉を使って、二つあげよ。

「悪いことをした者に対して行う行為は許されるということ。」

「飢え死にしないためにしかたなくする悪は許されるということ。」

(2)「大目に見る」の意味を調べよ。

「失敗や不正を厳しくとがめないこと。」

■第三段落 第三節（六五・15～六七・3）

一 「下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である」（六五・15）について、

(1)「冷然」の意味を調べよ。

「冷ややかな態度をとること。」

(2)下人が老婆の話を「冷然として」「聞いていた」のはなぜか。

「許すべからざる悪への反感の気持ち冷めており、老婆への侮蔑の感情が下人の心を占めていたから。」

(3)「ある勇気が生まれてきた」とあるが、それはどのような

「勇気」か。

「盗人になる勇気。」

二 「きつと、そうか。」老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにことう言った。「では、おれが引剥ぎをしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ」(六六・9)について、

(1) 「嘲る」の意味を調べよ。

「人をさげすんで悪く言ったり笑ったりする。」

(2) 「念を押す」の意味を調べよ。

「繰り返し注意する。何度も確かめる。」

(3) 「嘲るような声で念を押した」(六六・10)からは、「下人」のどのような心情がうかがえるか。⁷

「生きるためには悪も許される」という論理を述べたことによつて、逆に下人の引剥ぎを正当化することになったという、愚かな老婆への侮蔑。

(4) 「不意」の意味を調べよ。

「予想外のこと。思いもかけないこと。」

三 「下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた」(六六・15)について、

(1) 「下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった」とあるが、この行為は「下人」のどのような意思表示か。

「盗人になる勇気を獲得した」という意思表示。

(2) 「夜の底へかけ下りた」とあるが、この表現は下人のどのような未来を暗示しているか。

「先の見えない暗黒に彩られた未来。」

■第四段落 第二節(六七・4～六七・9)

一 「しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はって行つた。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない」(六七・4)について、

(1) 「死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の

体を起こした」とあるが、「老婆」のどのような心がうかがえるか。

「生への執着心。」

(2) 「黒洞々たる夜」とは、どのような夜か。

「真つ暗で先が見えない暗黒の夜。」

(3) 「黒洞々たる夜」(六七・8)という表現は、どのような効果を上げているか。⁸

「黒による空間的な深みを感じさせ、また、白髪の白と夜の黒との対照を際立たせることで、異様で不気味な世界を築き上げる効果。」

(4) 「下人の行方は、誰も知らない」とあるが、下人はこの後どうなったと考えられるか。

「盗人になり絶望の世界を生き抜いていった」「盗人になりきれず飢え死にしてしまった」「盗人になったものの自らも盗人に襲われ闇の世界へ葬られた」など。

■作者「芥川龍之介」について、文学辞典や国語便覧(国語資料集)などで調べてみよう。

(1) 彼の文学的立場は、菊池寛や久米正雄らとともに何と呼ばれたか。

「新思潮派(新現実主義)」

(2) 彼の作品『鼻』を激賞した作家は誰か。

「夏目漱石」

(3) 彼に文学的な影響を受けた主な作家は誰か。

「堀辰雄・太宰治ら。」

(4) この『羅生門』や、『鼻』以外の彼の代表作をあげよ。

『地獄変』『戯作三昧』『河童』『歯車』など。